

タイオキシン、環境ホルモ
ン、BPA(BP) (狂牛病)……。暮
せに言わずキーワードが自次
にならぬ。

九月に刊行された『環境リ
スク学』(中西準子著・日本
評論社刊・千八百九十円)
は、地球規模から日常生活に
至るまでの「リスク評価」が
わかりやすく書かれた本だ。

著者の中西さんは、かつて
東京大学、横浜国立大学で教
鞭をとり、定年退職した現在
もなお環境工学に取り組み第
一人者。すでに何冊ものペス
トセラーを出版している。

その最終講義が収められた
同書は、初版から約二カ月で
すでに四刷目、総刷部数一万

二千部。専門的テーマを扱っ
た単行本としてはかなりの好調
なスタートといえるだろう。

「これほどの環境本は、危
険性を前面に出して読者の恐
怖をおおるものか、マカデミ
ックな専門書に大層な分かれ

ベストセラー ————— 秘密

ていました。でも『環境リス
ク学』は、ただ怖がるのでは
なく、リスクを不安とどうつ
きあつかう、考えるべきかほ
になる本だと思えます。それは
担当編集者の佐藤大樹さん。

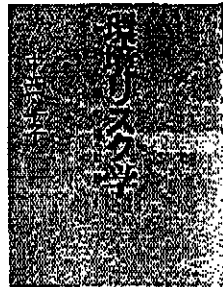
佐藤さんは、同書以外にも

「環境リスク学 不安の海の羅針盤」

(中西準子著、日本評論社)

「地球と人間の環境を考え
る」という一般向けのシリー
ズを手がけている。環境問題
をテーマ別に扱い、全十二巻
のうち九巻までが好評に刊行
中。『環境リスク学』は、こ
のシリーズの基本となる巻
方でもある。

著者の人柄がうかがえるよ
うな読みやすい文章のため



が、行政、企業の関係者を中
心に、比較的若い世代の読者
が多い。

「田中先生の半生記」もな
っていて、懐かし、現在に際
する事への考え方の姿を描か
れています。そういう意味は
は、ビジネス書としても読ま
れているのではないのでしょうか」と分析するのは宣伝部の
金田功さん。

宣伝部では、新聞広告を専
店での、リスク論とい
う言葉を大きく使った。

「環境に限らず、リスク
論はいま花盛りですよね。

ジャンの多い著者の集大成の
ような本ですから、初めから
厚紙の配本を予定してしまっ
た。でもよく一般の人にも購
入でもいえるよう、わかりや
すい言葉を前面に出したんで
す」(金田さん)

しかし販売部の江波戸成さ
んは「短期間でこれだけ動
くとは、この書店を回って
なかったのでは」という。業
界後手に各新聞、雑誌の専
評欄で取り上げられた同書
は、十一月に入った時点で三
刷が完成していた。

「この三刷もあつたらう間

に売れてしまいました。それ
を聞いて書店さんが平台に置
いてくれたんですよ、追い風だ
になった風です」(江波戸
さん)

話題性や企画のユニークさ
が先立つ書籍作りが増えてい
る中で、読者の高い読者層へ
向けて作られた良書である。
それが目の肥えた読者たちに
紹介され、その「一般に広く
知られる」といった。

親を養育する人なら、誰か
が気になる内容の『環境リス
ク学』は、ロングセラーに向
けて、準備なスタートダッシ
ュを切ったばかりだ。

(ライター 藤野美穂)
—————
隔週掲載

